

F₁とうもろこしの短期間栽培(Ⅰ)

札幌研究農場 山下 太郎

F₁とうもろこしの栽培は通常栽培(フルシーズン栽培)と短期間栽培にわけて考えることができます。

一般的な栽培法は通常栽培のほうで、栽培地での農耕期間をフルに活用し最多収をあげることが目標となり、適品種の選定に当たっても農耕期間中の総有効積算温度を指標とし、それと対応した熟期の品種を栽培し、利用もサイレージが中心となります。

一方、短期間栽培は、読んで字のとおり、農耕期間中の一定期間を区切り、短期間で栽培・利用する方法をさしています。府県の条件の良い地帯ですでに広く行われている「夏播き栽培」等が該当し、この場合、前作あるいは後作に他の一年生飼料作物等が組合わされています。実際の栽培例はまだ少ないようですが、F₁とうもろこしの二期作も、短期間栽培の典型的な例としてあげられ、台風の回避あるいは青刈利用+サイレージ利用の組合せ等、今後の普及性は高いと言われています。

ここでは東北・北海道の道央、道南を中心とした短期間栽培を牧草地との関連にしぼって御紹介します。

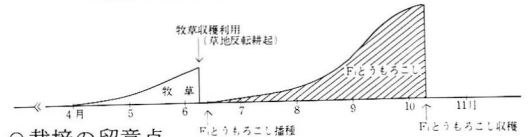
◎ 老朽化草地の更新と短期間栽培の組合せ

1番牧草の収穫利用後、草地を反転耕起し、その後直ちに、F₁とうもろこしを栽培します。(右図のとおり) 少ない耕地面積の場合『草地更新はしたいが更新年の減収が飼料生産にひびきどうもふんぎれない』という声をよく聞きます。しかし、この方法で更新を行なうと牧草は1番草で年間の約1/2、更に F₁とうもろこしも TDN で 1,000 kg/10 a 程度の生産をあげることができ、収量減どころか増産につながります。

この方法の良い点は、毎年計画的な草地更新が可能となること、同時に飼料根菜類を含む輪作栽培がスムーズに行なえ、自給率の向上、地力の培養にも役立つこ

と等があげられます。

○ 1番牧草収穫利用後のF₁とうもろこし短期栽培



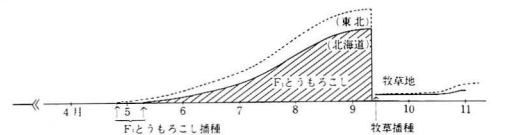
○ 栽培の留意点

- ・ 牧草地は秋施肥によって1番草の増収をはかること。
- ・ 草地反転耕起から F₁とうもろこし播種までの作業を手早く行ない、F₁とうもろこしの生育期間を確保し、晩期収穫に努めること。
- ・ 牧草根の分解に窒素分が使われる。従って、窒素を成分量で 3 kg/10 a 増施すること

○ 適品種の選定

- ・ 栽培期間中の有効積算温度で適品種が決まる。札幌における品種比較試験成績(下表)を参照のこと。
- ・ 道央ではニューデント 75日,85日,道南ではニューデント 95日,105日,東北ではパイオニア A号,スノーデント A号等が適す。

◎ F₁とうもろこし短期間栽培と秋播き牧草地の組合せ



○ 栽培の留意点

- ・ F₁とうもろこしはできる限り早播きし、この段階で土壤改良を充分行なっておくことが大切。
- ・ 北海道では F₁とうもろこしの品種は極早生とし、適応地域も、道央・道南の条件の良い地帯に限られる。

◎ 短期栽培における品種比較試験成績

札幌研究農場 (昭52)

	試験処理	品種名	絹抽出 糸期	熟度	収量 (kg/10 a)					
					生草	比率	乾物	比率	TDN	比率
①	播種期 6月13日 収穫期 10月14日 7,700本1本立	ハイゲンワセ	8. 15	黄 後	4,162	100	1,487	100	1,084	100
		ニューデント75日	. 14	黄 中	4,988	120	1,670	112	1,211	112
		ニューデント85日	. 19	黄 前	5,647	136	1,685	113	1,209	112
		ニューデント95日	. 25	黄 糊	6,858	165	1,912	129	1,330	123
②	播種期 5月14日 収穫期 9月26日 6,700本1本立	ハイゲンワセ	8. 2	黄 後	4,111	100	1,269	100	944	100
		ニューデント75日	. 1	黄 完	4,556	111	1,397	110	1,025	109
		ニューデント85日	. 7	黄 後	6,019	146	1,562	123	1,135	120
		ニューデント95日	. 11	黄 中	6,408	156	1,604	126	1,144	121

註) ① 1番牧草収穫後の F₁とうもろこし栽培を想定して、栽培期間を設定。栽培期間中の有効積算温度は869℃。

② F₁とうもろこし収穫後の秋播き牧草地の造成を想定して栽培期間を設定。栽培期間中の有効積算温度は838℃。尚、ニューデント75日は9月10日で黄熟期収穫が可能である。